

観音様のご利益

出水市の掛腰かけこしという集落の観音様はたいそうご利益があるといわれ、次のような話が伝えられています。

ある夏の昼下がり、村の男が、野良仕事のらの半なかはでいびき、家の中で休んでおりました。すると、ジャンジャンと、半鐘はんしやうが鳴り響きます。

「どこだ、何事だ」と、男は家を飛び出し、半鐘が鳴った観音堂の方に向かって走りまわりました。すると、途中の小さな川で、子どもが浮き沈みしているのが見えまわりました。男はとっさに、何も考えず川に飛び込み、その子どもを抱きかかえて岸きしに上がりました。そうして、助けた子どもを見て驚きました。わが子だったのです。半鐘の音はもう聞こえませんでした。子どもの無事を確認すると、観音堂に行ってみました。お堂もその周辺もシーンとしていて何事もなかったようです。だいたいは、ここには半鐘がないのです。さらに、村の人たちに尋ねると、その半鐘の音を聞いたのは男のほかにはいなかったのです。このことを知った村人はみな、観音様のご



利益だと語りあい、感謝をこめて参拝さんぱいしました。

それから、昭和時代になつて、観音堂のすぐ近くの木や家に雷が落ちて人が亡くなるということがあったそうです。ところが、同じとき、観音様の松の木にしがみついていた人は無事であったので、やはりご利益があると評判になりました。また、第二次世界大戦も終わりの頃、このあたりにも敵機ていきが飛んできて爆弾を落としました。周辺の民家は倒壊とうかいしたりしたというのに、お堂も無傷で観音様もいつもと変わりなく立っておられました。人々の崇敬すうけいの念がさらに高まったのはいうまでもありません。

その後、お堂は建て替えられ松の木もなくなりました。場所は、車が絶え間なく行き交う十字路の脇ですが、お堂の前には花壇かだんが整備され、四季の花々で彩られています。観音様に寄せる思いは、昔も今も変わらないようです。



〔原話「出水の昔ばなし」〕
文／有馬英子 絵／二石綱夫